

◆荒井良明 選

《人口に膾炙した一茶の句から》

やれ打つな蠅が手をすり足をする 小林一茶

小学生でも知っているくらい人口に膾炙した句。「手をする足をする」と覚えていた人も多いようですが。蠅を擬人化した滑稽味のある句です。

海野和男は、「ハエが手足を擦るのは掃除をするためだ。手足や顔のしたのヒゲなどは感覚器官としても重要だ。ハエは案外きれい好きなのである」と言っています。不潔なものの代表のようにいわれる蠅が、きれい好きというのも可笑しい。

《一茶の次は蕪村の句から》

稲妻や浪もてゆへる秋津島 与謝蕪村

「ゆへる」は「結へる（ゆえる）」。「秋津島＝大和国。また、本州。また広く、日本国の異称。（広辞苑 第七版）。要するに、波で日本列島を結ったという、なんとも気宇壮大な一句です。日本列島が、髪を結うように波で結われている景。雄大な滑稽味が感じられます。

《きちんと観察して写生すれば》

死にきらぬうちより蟻に運ばるる 相^{あい}生^{おい}垣^{がき}瓜^か人^{じん}

「一読破顔。ブラックユーモアに溢れ…蟻の性急さが笑いを誘う」（中原道夫の評言より）。

イソップ寓話の「蟻とキリギリス」（本来は「蟻とセミ」のようだが）を引くまでもなく、蟻は夏のうちに食料を蓄えるべく、せっせと餌を運ぶ。他の昆虫の死骸・屍をみつけては、巣に運び入れる。時には、死骸になっていない（まだ生きている）ままで運ばれる昆虫もいる。きちんと観察して、自然の冷酷な一面を「写生」して得たブラックユーモア。

《死後に骨をほめられる ブラックユーモア》

隠亡^{おんぼう}がほめし一骨山桜

嶋田麻紀

隠亡とは「死者の火葬・埋葬の世話をし、墓所を守ることを業とした人。（大辞林第三版）」である。

そうすると、掲句は火葬場での骨あげ（骨拾い＝火葬にした死者の遺骨を拾いあげる）の景を詠んだもの。ブラックユーモアの横溢。

《能村登四郎の滑稽句》

薄目^{うすめ}せる山も混じりて山眠る

能村登四郎

郭熙^{かくき}の画論『臥遊録^{がゆうろく}』に「冬山^{ふゆさん} 惨淡^{さんたん}として眠るが如し」とあることからきた季語「山眠る」は、「冬季の山が、枯れていて全く精彩を失い、深い眠りに入るように見えるのをいう。（広辞苑 第七版）」。

その眠っている山の中に「薄目（まぶたを細く少しあけた目）」をあいている山がいるという、山を擬人化したユーモア。能村登四郎がこんな諧謔^{かいぎやく}味^みに富む句をものしていたとは、今回調べてみるまで知らなかった。諧謔は、「おもしろい気のきいた言葉。おどけ。しゃれ。滑稽。ユーモア。（広辞苑 第七版）」

《成人（？）になった瞬間に「余命三日」》

死なうかと囁かれしは蛍の夜

鈴木真砂女

蛍の雄の命は三日ほど。ほとんど飲まず食わずで、次の世に命を繋ぐためだけに生きている感のあるのは哀れである。空中に光の乱舞をするのは雄。

「蛍の光は求愛信号である。明滅しながら飛ぶ雄に草むらの雌が光を返すと雄はその近くにとまり、互いに明滅しながら交尾する。」（長谷川權「角川大歳時記」）。

「草蛍」という季語もあるが、雌蛍のことだ。ここまでお読みになって、「それはいいけど、なんで掲句が『滑稽句』なんだ？」と思われた方も多いと思う。まあ、続きをお読みください。種明かしいたします。

《雄の蛍の明滅は「死のうか」という囁き》

真砂女に「死なうか」と囁いたのは男だろう。雄の蛍の光は、雌に対するラブ・コールであり、蛍は歌垣（かがい）の夜を過ごしている。

《「交尾＝死」という雄の蛍》

雄にとって、求婚に成功し交尾を果たしたのちに待つのは死である。エロスとタナトス。だから、蛍の夜に「死なうか」と囁くのは男なんだ。とまあ、蛍の生態とその一生（とりわけ雄のそれ）を思うと、私は、掲句に滑稽を感じ、ニヤッとさせられるのだ。

《戸隠の蛍》

戸隠（長野市）ではよく蛍を見た。戸隠には源氏蛍、平家蛍、姫蛍の三種が（三種同時にではないが）見られる。戸隠の蛍は日本一高く飛ぶそうだ。

信濃では蕎麦と仏と蛍たち

良明